

北米国境を視察して

川久保文紀（中央学院大学）

1月28日から2月6日にかけて、科研費基盤A（研究代表：岩下明裕教授）「ボーダースタディーズによる国際関係研究の再構築」による北米国境視察に参加する機会を得た。参加者は、岩下明裕教授を団長に、トニー・パヤン教授（ライス大学）、コリア・カブレラ教授（テキサス大学ブラウンズビル校）、ユッシ・レイン ABS（境界・国境地域研究学会）事務局長と筆者の5人であった。出発当日、偶然にも成田空港で働く教え子にセキュリティ・チェックを受け、「いってらっしゃい」と見送られて旅は始まった。

成田からジョージ・ブッシュ・インターコンチネンタル国際空港（ユナイテッド航空の本拠地空港）まで約12時間のフライトであった。真冬の日本から20度近いテキサス州ヒューストンに降り立ったわけであるが、あまりの寒暖の差に体が震撼したことを覚えている。シャトルバス（シャトルといっても、乗り合い方式の中型のバン）に乗って、すぐさまパヤン教授のオフィスがあるライス大学に向かった。メールで事前に研究棟の名前と研究室番号を聞いていたが、キャンパスに立ち上がったときに、その広大さに愕然とした。シャトルの運転手に、ゲートは何番（かなりの数があった）ですかと聞かれても、それについては何も聞いていなかったちんぷんかんぷんな私に、運転手は丁寧にもキャンパスを歩く学生に聞きながら、私をなんとか届けてくれた。パヤン教授の所属するベーカー研究所は、その名前からも予想できるように、アメリカ政界の重鎮であり、第二次レーガン政権では財務長官、ジョージ・H・W・ブッシュ政権では国務長官を務めたジェームズ・ベーカーとその一族に由来している。その規模と研究スタッフの陣容からしても、公共政策系の大学シンクタンクとしては、全米屈指の名門である。

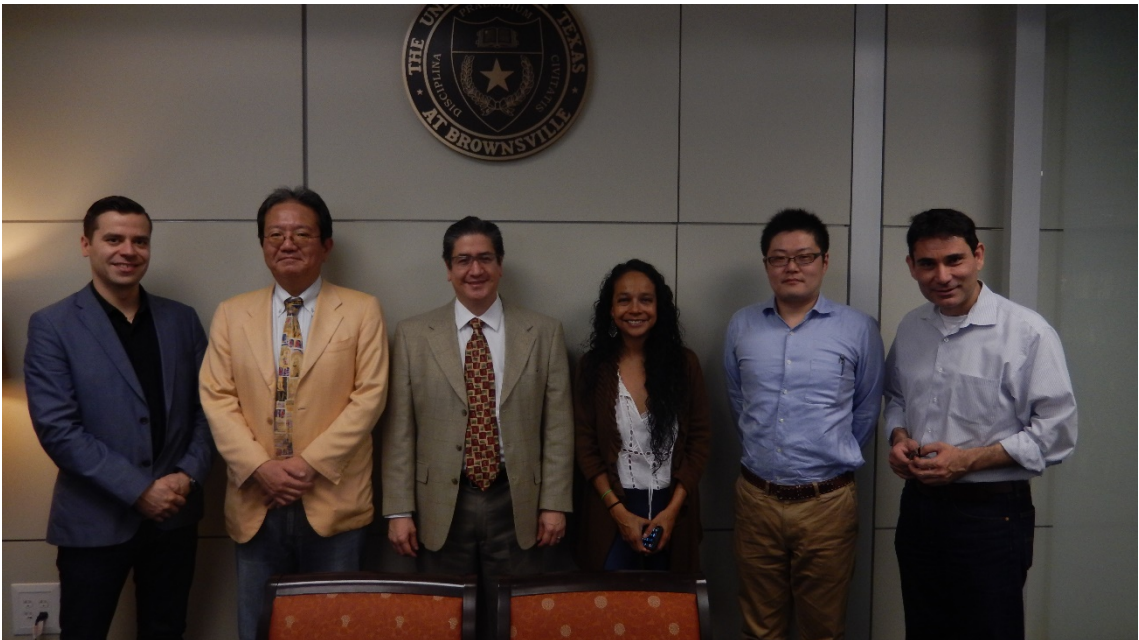
パヤン教授と挨拶をして一息つく暇もなく、パヤン教授の車で、米墨国境の街ブラウンズビルに向かった。12時間のフライトの後に、片道6時間のドライブはさすがにこたえた。ヒューストンのダウンタウンの高層ビル群を眺めながら、片道5車線のハイウェイを少し走ると、荒涼とした風景が段々と広がってきた。眠気が時折襲う中でも、山が一つもないフラットな土地と遠くにメキシコ湾を臨む車窓からの景色は、壮大であった。夜11時頃にブラウンズビルに到着したが、あまりの疲労からか自分の部屋に直行し、倒れるように寝入ってしまった。

翌朝、ホテルのロビーで、今回の視察に参加する一行と挨拶を交わし、さっそく旅が始まった。まず訪れたのが、コリア・カブレラ教授の勤務するテキサス大学ブラウンズビル校のキャンパスである。その大学は学生数約8000人であるが、その学生の約9割がヒスパニック系という、まさに米墨国境に一番近い大学ならではの特徴をもっていた。ブラウンズビル校を含めたテキサス大学システムは、10の大学と4つの医科大学からなる全米有数の州立大学機構であるが、ブラウンズビル校も含めて、現在統廃合が進行しているそうである。そ

うした状況の中で、忙しい合間をぬって、教務担当学部長がわれわれ一行と会ってくれた。



【テキサス大学ブラウンズビル校】

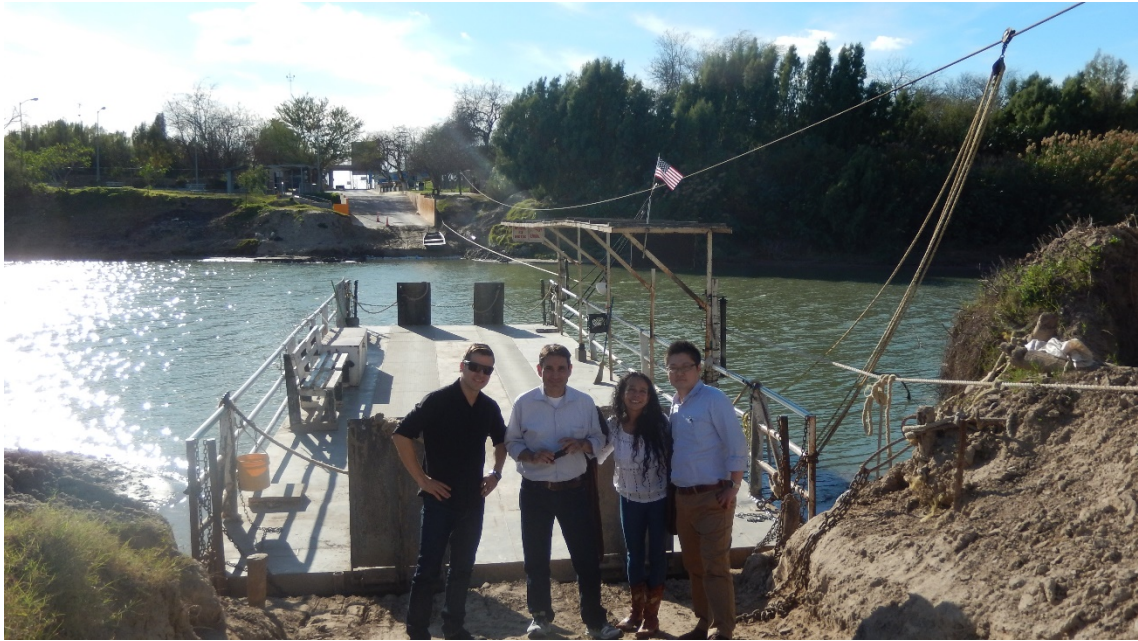


【テキサス大学ブラウンズビル校教務担当学部長（左から3人目）を囲んで】



【合衆国旗とテキサス州旗が同じ高さで掲揚されている（これは、全米 50 州の中でテキサス州のみだそうである）】

次に向かったのが、米墨国境の国際フェリー乗り場として知られるロスエバノス(Los Evanos)であった。フェリーは、テキサス州のロスエバノスとメキシコのタマウリパス州の町を結んでいるが、川の向こう岸まで 5 分もかからなからいであろうか。1950 年代に運用が開始され、2013 年に新しい検問施設ができたこのフェリー乗り場は、冬期になるとアメリカ人観光客が多く訪れる場所らしいが、「国際」フェリー乗り場という言葉から連想していたイメージは、大きな船着き場というものであったが、実際に行ってみると、その小ささに驚いたというのが正直なところである。フェリーといっても、車は 3 台、人は 12 人までという人力で古い木製の平たいボートを引くというものであった。言葉からの連想から生み出されるイメージと国境の現場を実際に見ることによって、国境に対するイメージ・ギャップをどのように認識するのかという、境界研究における perception 問題にも通じるような気がした。



【ロスエバノス国際フェリー乗り場にて、向こう側がメキシコ】



【廃墟と化したかつての免税ショップ】

午後は、4つあるラレド国際ブリッジ・システムのひとつを構成している世界貿易ブリッジ（通称：NAFTAブリッジ）に向かい、トレーラーなどの大型車両による米墨国境の物流貿易の実状を視察した。ここは、リオ・グランデ川を挟んでテキサス州ラレドとタマウリパス州ヌエボラレドを橋で結んでいるが、2000年に開通した世界貿易ブリッジは、州間高速道路35号線の交通渋滞を緩和させるために建設され、商業用車両だけが通行を認められて

いる。数珠つなぎに行き来するトレーラーやトラックの数の多さにも圧倒されたが、通称 NAFTA ブリッジと称されることから分かるように、NAFTA 締結による米墨国境の物流貿易が劇的に増加していることを象徴している光景であった。ただ、メキシコの農産物の現状は、とくに主食である豆類やトウモロコシに関して、アメリカ産のものが大量に流入してくることによって壊滅的な打撃を受けているということを、パヤン教授から後で聞いた。日本とアメリカとの TPP 交渉如何によっては、現在のメキシコの農業の現状が、日本の農業の行く末になるという危機感を強くした。



【世界貿易ブリッジ（通称 NAFTA ブリッジ）】



【アメリカからメキシコへ向かうトレーラー群】

翌 30 日は、これもまた米墨国境の街であるテキサス州ラレドに滞在した。ラレドは、テキサス州南部に位置するウェブ郡の中心都市であり、メキシコ側のヌエボラレドとともに大都市圏を構成している。ラレドはリオ・グランデ川の北東部にあり、メキシコとの物流貿易の主要拠点のひとつであり、アメリカでは最大規模の内陸港湾施設を有している。ラレドからは橋を歩いて渡り、メキシコ側の対岸都市であるヌエボラレドに着いた。朝から地元のひとたちで大勢賑わっている食堂でメキシコの伝統的な朝食（焼きたての本場のトルティーヤに、これまた本場のサルサソースをつけて食べたが、まさに絶品であった）をとってから街を散策したが、その街並み全体はスペイン植民地時代の建築様式に彩られていたことが印象的であった。



【メキシコからアメリカに入国しようとする朝の車列】



【アメリカ側からメキシコ側を臨む、国境検問所の建物】

翌日は、テキサス州ロスデリオ(Los Delio)とメキシコのシウダードアキュナ(Jiudad Acuna)へとさらに北上し、夕食をとってから、歩いて国境を渡った。たった一時間程度の滞在ではあったが、地元の人で賑わうトルテック(南メキシコの民族)バーで本場のマルガリータを四杯も飲んでしまった。日本にいるときは、私にはカクテルなど飲む習慣はないが、本当にキレのある(甘ったるくない)マルガリータは抜群であった。まずバーに入って驚い

たことは、銃をもった警官4～5人ぐらいが客の動きを監視していたことであった。メキシコにおいて、政府と麻薬カルテルとの間で激化した麻薬戦争の隠れた舞台のひとつは、実はこうしたバーであったのであり、日常的に暴力沙汰もあったのだという。現在は、だいぶ落ち着きを取り戻し、われわれのような観光客でさえ、行くことができるようになったのである。



【夜の国境検問所】



【シウダードアキュナ】

31日は、米墨間の水の国境を視察した。そこは、ラレドとヌエボラレドの南東約60キロに位置するファルコン国際貯水池であった。治水や水力発電などの多目的な用途のために建設されたファルコンダム（築堤ダム）が、その貯水池の中心的な施設をなしていた。このダムは、354平方キロの面積をもち、1953年、アイゼンハウアー米国大統領とコルティネスメキシコ大統領のときに運用が開始された。このダムは、「国際境界と水に関する委員会（IBWC）」を通じて両国政府が水利権の配分や水質保全などの面において共同で水の国境管理を行っている。ダムの堤防の部分は、車が通れるように国境をまたぐ道路としても使用されている。2010年には、メキシコの連邦警察を名乗る海賊が出現して、アメリカの釣り人を脅迫したり、ロスゼタスの麻薬カルテルがこのダムの破壊を目論んでいたことも明らかになった。



【ファルコンダム】



【国境警備中の係留気球】



【米国税関国境警備局(CBP)の車両】

約4日間かけて、日本人がまず訪れることのない米墨国境の北東部（約1000キロ）を見て回ったが、アメリカの国境警備の現状についても知ることができた。上の写真は、係留気球による国境警備の風景、下の写真は、米墨国境の至るところでパトロールしているCBPの車両である（とはいっては、停車している場合がほとんどである）。9・11テロ以降、CBPの人員と予算は右肩上がりに増加しているが、不法移民の検挙や麻薬取締りにおいて、本当

に効果的な対処が出来ているのかという根本的な疑問が浮かび上がる。米墨国境に沿って設置されている有刺鉄線を張ったフェンスの下には、センサーが設置されている箇所も多いらしいが、動物などにでも反応するそうである。このようにみると、民間セキュリティ産業などと一体となった「国境のテクノロジー化」の昂進現象は、「アメリカの国境を安全にする (secure America's border)」という国家目標に資しているのだろうか。様々なレベルでの継続的な検証作業が必要であろう。

他の一行と別れた後に、私ひとりで行った視察の後半(2月4日-6日)は、米加国境の視察、および米加の国境政策に関して定評ある研究所を有する西ワシントン大学訪問であった。まずヒューストンからカナダのバンクーバーに空路で入り、バンクーバーからレンタカーを借りて米加国境を越え、大学のあるワシントン州ベリンハムへ向かうというものであった。バンクーバーに実家をもつ友人の薦めもあり、バンクーバーでは、日本人観光客の多くがホテルをとるダウンタウンではなく、空港に近いところに泊まった。これが正解であった。レンタカーも借りやすく、ベリンハムへは、99号線(カナダ)と5号線(アメリカ)を単に南下すればよいだけであったからである。

車で一時間も経たないうちに、米加国境のピース・アーチに到着した。ここは、国境周辺が公園になっており、その公園内部は規制なく誰でも自由に写真を撮ったり、散策することができた。緑々しい芝生とセミアムー湾が臨めるその国境風景は、米墨間の国境風景とは完全に異なり、二国間の国境でもこれだけの「非対称性」を醸し出す風景も珍しいのではないだろうか。高さが約20メートルあるピース・アーチは、19世紀の米英戦争終結後に結ばれたヘント協定を記念したものであり、1921年に開通した。このアーチの中には、両国国境にまたがる形で“**May these gates never be closed**”と記されており、両国の友好関係を象徴するモニュメントとして知られている。



【米加国境の標識（カナダのブリティッシュコロンビア州サレーとアメリカのワシントン州ブレインの境界）】



【アメリカ側からカナダ側への国境、NEXUS レーンも見える】



【ピース・アーチ】

ピース・アーチから車で約 20 分行くと、ワシントン州ベリンハムに着いた。あいにくの雨であったが、緑と海に囲まれたのどかな町であった。人口は約 8 万人であるが、日本食レストランがよく目に付いた。ベリンハム湾を臨む小高い丘の上とその斜面にそって、西ワシントン大学のキャンパスが広がっていた。私も、アメリカに留学していた頃を思い出したが、アメリカの大学のキャンパスでまず驚くのが駐車場の広さである。レンタカーには、GPS も着いていたので、キャンパスには簡単に着いたのであるが、キャンパスの中で道に迷ってしまったのである。これは本当の話である。キャンパス案内図もプリンアウトしてもっていったが、その地図もわかりにくいことも一因であったであろうか。

西ワシントン大学は、1893 年の設立当初は女性のための教員養成学校としてスタートした歴史をもっているが、現在は約 1 万 5000 人（ほとんどが学部生）の学生を擁する大学となっている。レッド・スクエアと呼ばれる広場の周りに様々な施設が建っているが、そのひとつでボンド・ホールの 4 階に、国境政策研究所があった。そこで出迎えてくれたのが、デビッド・デビッドソン暫定所長とローリー・トラウトマン博士であった。ここで長く研究所所長を務め、現在も境界・国境地域研究学会(ABS)の重鎮でもあるドン・アルパー教授はすでにリタイアしていた。この研究所は、小規模ながらも、国境政策に関する研究実績では非常に評価が高い研究機関として知られている。米加国境の貿易・運輸、移民、環境、経済などの多く分野に関するシンポジウムや学会を開催し、定期的に発行している「国境政策研究レビュー(Border Policy Research Review)」は、研究者のみならず、国境管理に携わる実務家などにとっても必読の書となっている。所長室で 1 時間程度、意見交換する機会があったが、私の研究関心について丁寧に質問してくださったうえに、データが豊富な関連資料まで提供してくださった。私の準備不足でやや嘸み合っていないところもあり、勉強不足を恥

じたのであるが、貴重な時間を割いてくださったことに心より感謝している。第一線で活躍しているお二人のプロフェッショナルリズムに接し、緊張感をもって研究に臨む姿勢の大切さを改めて痛感した次第である。



【学生たちが行き交う西ワシントン大学のキャンパス風景】



【西ワシントン大学国境政策研究所にて、デビッド・デビッドソン暫定所長（右）とローリー・トラウトマン博士（左）と】

1週間にわたる北米国境の視察であったが、一言で国境といっても、米加・米墨の国境を比較すれば、相互の国力の差が如実に現れる権力空間であるということを思い知った旅であった。現在のボーダースタディーズの潮流としては、国境は常に社会的に構築されるプロセスの産物であるという新しい見方が支配的になってきたとも捉えられるが、北米国境の比較的視座からすれば、国家権力があからさまに衝突するリアリズムがいまだに随所に見て取れるという伝統的な見方をぬぐいさることはできないだろう。今回の視察全体を通じて感じたことは、国境とは、単純に開放されるか閉じられるかという二項対立的なロジックでとらえられるべき空間ではなく、その国境が引かれた歴史的な文脈や現代的な課題に対応した多面的な理解に基づいて認識することによって、新たな地平が見えてくるということではないだろうか。